寛永諸家譜

清和源氏甲九冊之内
義家流之内新田流

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (6)
函號 帝 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

松平

寛永諸家系圖傳

清和源氏

義家流

甲二

淺草文庫

松平

泰親信光の廣流

泰親

信廣

太郎左衛門尉

參列ようまれ

脚の屈ましありて松平の郷に蟄居
子孫この巻物を清よ見てよ

信光
和泉守

守家
左京亮

守親
左京亮　法名金孝

親吉
与二郎　玄蕃允　法名金長

清吉
与二郎　玄蕃允　伯耆守
はじめ叅引竹右衛門と称して今川義元に

屬し女子をつゝして人質とし其後
永禄三年人ちをすて
東照大權現みつくへたてまつり書をと質
よ故をこれより氏真いゝうて清苦ゞ
むをめとつゝへてこれを聟よつゝめく
三列上郷の城を移爰者郎八清苦ゞ
た孫がゝれ兄ゝうとゝいへども氏真よ屬
ゝ和ゆへれとわゝてふる三日のあひ
だ和して七十餘級の首ゝうとゝ家

人死ゝりのおりうめゝち
大權現是濃ゝう御馬をと上郷みすゝら
ゝ上ゝ名古山よ陣とすゝられ甲賀
方よ命じてひうふ枝城をおうして
せゝとゝ
大權現家臣等をゝておゝせを書を
よ命じて遠列宇津山のうゝ生をま
りゝ三ゝんとのたまひけゝども清うけ
ゝりのかゝしときよ清苦原兵の少た

ものと心ゑ申しちふくのこふりむん
すを言とし申けれハ
大檜現ゆゑ[illegible]たまふより法ゆゑもてそ
乃うり出をとまりう
大檜現うれ忠功を賞じたましく遠民
のうち支丹村よりおのく千貫の地をた
まり御判形ゝ御書を以載を
七度宮津へ行相しらる忠節
祝義儀和りゑ貫文ゝ紀ヲ

付ゝ之旨相左清つ府ゝ[illegible]
元亀三

十月廿七日　家康御判

松平伯耆守殿

天正十五年四月廿三日病死 年八十三

法名金清

清宗

与二郎　玄蕃允　伯後守

母ハ松平紀伊守家廣ゞむすめ
小原肥前守今川ゝ屬して參引右四の
城ゝ領するとき
大檀現畏濤より兵を出し七ヶ所をけて
これをせめたまふとき清宗供奉し
おりをとらはけたまりて訪會寺ゞらをせ
りて捷をあハせ二ヶ所の敵をかうゆゑ
清宗ゞ家人うち死をとりの三人歌の頸
又級をとりとれ

永祿十一年酒井忠次中守遠引無川
よりはしをとる七川氏真駿府をとりて
無川の城よりゆく
大檀現兵を發してこれをせめたまふとき
清宗ゞこゝ引きりて無川の南金杉村ゞ
陣をとりて出バ〳〵あひしてう
遠引之方原合戰こゝをかりて玉取清宗
鉤命をとけたまりう同ゝ城ゝの城ゝ加
勢ゝおもむく城ゝハ大沢ゞ居城なり

大檜現石川日向守と熊川の堀ヲ
をくまく甲列の法ちものゝくゝちち
てこれとせむ日向ハ清家が姉婿なゆへ
大檜現清家とはかりはしてこれ城もくゝ
しむるのち諏訪原ヲ生陣のとき
甲列の兵士とゆせんこゝよ清家
命とゝゝりて遠列新坂境井原ヨ
居ちそのち遠列よりゝくゝケ浅村
菅谷村亀甲村の地とたまハる熊川

堀江の軍功小ゝりてなり
大檜現甲列勢とゆせんがため清家ヨ命
じて横須賀口登字利村字先田村ヨを
ゝむとなる遠列ゝくゝ釜田御厨の地を領ス
遠列二股ゝびよ小笠山高天神小山
諏訪原後列田中沼庭ゝれかゝの
御陣ごとに
大權現ヲ中ゝこゝ八いゝてまつり軍ヲ
とつゝむ

参列長篠合戰のとき　拘命より
りて酒井左衛門尉くみより列と
天正十年
大檜現御馬と甲列新府よりたまふ
とき清宗甲列大將にあり小泉氏及び
軍士兵とおこして足弱より陣とて清宗
うしと合戰して十七の首級をとらと
ゝのち　給とゝゆりて子家清より
知領の地とゆづり参列什器より住とし
清宗八尾川より二子要の地をたまりて与
力ゐ十人のゝらとなりて後列真田寺より
きをうゝ
尾列長久手合戰のとき清宗同ゝくみ
家清とともに小田原勢とふせぐたゝか
奥國白より居まて
同十八年
大檜現小田原御陣のとき去原の書状つ
とむそれゝち温居まて

同十九年奥列侍陣のとき江戸和の丸
の御番をつとむ
寛長十年十一月十日病死六十八歳
法名　全業

女子
石川日向守家成が妻

家清
与二郎　玄蕃允

母ハ松平主殿頭伊忠が女
天正九年
大権現御妹とめ姫御諱の字をたま
ハる
同十八年小田原御陣より伊奉し御凱
の後武列八幡山より一万石の采
地をたまハる
同十九年奥列侍陣より伊奉て
寛長五年冥ぐ京合戦のとき石川の寄寄

とおかしく尾刑清則の養とつちたゝの
城とうけとる
関ケ原落居の後参刑吉田よりおくり
三百石の地と給て
同六年迄ゝ位下より叡
同十ゝ年十二月廿一日病死ス十ゝ歳
法名金剛

女子
久野三郎右衛つゞ書

女子
多居源七郎ゞ書

女子
異部内膳正長盛ゞ書

清定
内記
家清八幡山と給る時そ地とわり
ちて千貫の地をさゞ吉田よりつ
るとき又三千二百石とわらく給

ぜし

文長十年十二月十日病死二十一歳

法名金地

清信

同記

如ハ松平紀伊守家信ガむすめ

はじめ家清ニ嫁し忠清清昌ヲ産

して後離別ヨあり

清行

寛永十年はじめて御ヨおもむく

同十二年

初軍家ヨ為謁御供とつとむ

二郎兵衛

寛永十八年六月朔日

将軍家ヨ為謁

忠清

民部大輔　従五位下

母ハ

大膳亮の御妹

毛利兵部大輔元就ノ女

享長十五年父ノ遺領ヲ継ギ参河国

吉田ニ住ス

同十七年閏月二十日病死二十八歳

法名勝全

女子

本多豊後守康紀ノ妻

女子

松平主殿頭忠利ノ妻

女子

成田左馬助泰富ノ妻

女子

浅野采女正長重ノ妻

清昌

玄蕃頭

母ハ楠敏長八郎光正がむすめ

忠清死して後参列而勤よおわるくみ

ゑ石をたまいる

文長十九年大坂陶庫のと紀参長年坂

の責とつとむ

元和元年大坂乗乱のと紀侍大納言

頼宣卿ゆ志ゐ〻軍事とつとむ

清雄

民部

清方

常刀

玄蕃頭清昌家紋丸の内一引　式八葛葉

国立公文書館
National Archives of Japan

親忠

輿副

佐渡守　法名光忠

貞副

兵衛大夫

法名順阿

国立公文書館
National Archives of Japan

親忠

佐渡守　法名淨光

家廣

又七　法名道伯

永禄年中家廣ゟ一人とつかはし
駿河ゟ川義元ゟ質とる其後
東照大権現氏真と不和なりしと記

家廣ゟ手を切て
大権現ゟ度々の恩義あり乙川
口より味方よくはべきよしとかゝ
といへどもこれをきゝぶらゆへ乙川氏人質
の子をゆゑ世那尤の尾州演
まくこれと言して串ようゝぬくそな
大権現たびくれ御陣ゟ供奉

家忠

紀伊守　法名浄雲
武田信玄急ぎ遠州二俣の城へせむ
と紀家忠
大檀現の　おりせふすり加勢としてか
ふおりもく
遠州三方原合戦より信奉
参殿長篠合戦のとき紀

大檀現の命をうけたまりて家忠すびよ
杵三郎分安人坂浦とゐ新信玄方で
とうまへくせ篠とせむ家忠なゝむよ
杵三郎分さきげけとなりてうでとやき
て備利と得ゐ者の分おりくの首城ら
ちとゐこの様
大檀現御出陣のたゝとに家忠信奉と

家房

勘右衛門　法名惠芸

正重

石川勘助

ゆゝしの氏とついで石川と号す

関ヶ原陣のとき供奉

大坂冬度の陣より供奉して首級

ふゝ川を得う

寛永三年正月十日病死

法名浄覚

正成

次右衛門

寛永七年大坂御供のうち死す

法名浄心

政義

猪之助

生母民義

正長

勘助

寛永三年

台德院殿よりたくさんてまつる

同九年

信平

将軍家へめし出さる

八左衛門

将軍家へたてまつる御小姓組の

御番をつとむ

家信

又七　紀伊守

くゝりの家副後より家信とあらゝむ甲列

彩府御陣のとき

大樓現よりたゝくびしてまつり酒井雅楽頭

讃下よりつゝくゝ信列伝詰高鴻の塚と

せむ共のとき城中より敵中へ敵兵を
うひきてこれを家信これを戦てをいちらせ
相馬合戦のとき家信太山北先陣とな
りて時刻をうけさず先をやぶりぶ
軍功ををげまして勇名あり
大権現右二ケ度の感状をたまはれ
出陣のうびとして家信仕奉て
天正十八年参列 新京より上総国を并
ようつり御加増ありて新合四千石を給
慶長六年又 拘命ふまりて新京の中
領ようけ
同十五年正月二十六日迄四位下に叙
寛永十一年七月二十二日迄従四位下に叙
同十五年正月十日病死七十四歳
常立院と号て

康信
若狭守

生国上総

寛永十四年康信十郎すてられて
台徳院殿へ御ぞくしてまつり
同十七年迄又位下より叡しん業の業と
つとむ
同十九年大坂御陣のとき井上主計頭組
より属して供奉せり
元和元年九月家信康信父子
拘命をうけ参列秋原より播列
高槻へつりて二万石を給せり

寛永十二年家信康信父子又　拘命より
ありて下総ノ国さとうより四万石を
領せり
同十五年家信死してのち信康
拘命ありて家督をつぎ三万六千石
と給ひ其餘の四千石ハ今井二人よりて
わかつ
同十七年九月
播列高槻より信康
台命をうけ又
本地三万二千石

と領ず

勝信

助十郎

氏信

徳姫亮　生國參河

寛永二年十一月十三家ゝて

將軍家にたてまつる

同七年十月中奥ゝてたゝふ

同八年清切米五百俵をたまはる

同年十二月より南脇番をつとむ

同月二十九日従ゝ位下ゝ叙ゝて

同十ゝ年父家信死去ゝ家信が領地の

うち二ゝ百石をわけたまふ

家紋丸内利文字

助十郎勝信別紋丸内桔梗

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

光重

紀伊守

法名榮金

昌安

彈正左衛門

親貞

右馬允

国立公文書館
National Archives of Japan

来

七郎　大草より所住

三光

源左郎　若四郎　若兵衛尉

冬列伊賀より生家

正親

若四郎　若兵衛尉　生国同家

清康君　廣忠卿よりつゝく其後

秉照大権現より代々生家

永禄三年五月十九日今川義元と織田

信長尾州桶狭間にて合戦の時

大権現御歳十九にて義元より

命じたまふ時正親供奉して信長同道奉り

よとりをとりまゝへて和戦正親先陣より

すゝんていとゝん戦ゝ討死す四十八歳

法名真清

康安

若宮郎　若宮清尉　石見守

伊豫守　生國同前

二ゝび石見守と号せ

大檜現の命ありて若年より三郎信康を

よせつゝ十八年まゝちゝ戦場よ

りむゝ

元亨三年十一月武田信玄遠州よりとうし

まゝ二俣の城とせむとする時康安城中よ

りて中根平右衛門尉長清つゝびよ若宮郎長清

とあいせしに七月卒とゝげまゝかゝ城を

まもりて敵長塚下の川をせきこゝろゝ

ぜちよせんゝゝ柵をきりかゞす城中よ

り兵とさとつゝ白旗をとゞゝ川

を色ゝて換地をから和よ入ゝ康安

国よまゝゝれゝ兵とうかゞしんをバ歌兵

とさうして百騎ばかり火縄と鉄炮よ
さきてわるくんで是とをかんとをかは
らの一丈ばかりの石あり康安身と石れう
げよくくて是とまつたづくくありて歌
鉄炮とをかつにして味方は長ばくつき
て城中よりひきかりぎくといへとも康安
ひとり石のうげふありて歌のとくこまか
とうかぐひて鉄炮とをかつ事すべくく文
度其ほうにかりぎく

同年十二月二十二日
大檜現信玄と遠州三方原にて合戦の時
信玄大軍をひきわくきこと其長をかつぐ
おのくくて味方利あくぐて小笠原金平
とゆうのありつ孫よ康安と同くく戦場
小かもくくしの時金平是を是とあくす康安
ヒ又ヒくんで是とあくせ又ヒ而ヒ疵とか
うゆうて中あヒ矢二筋もりあくこか
康安こづうう一矢とめいくくヒとすつ今

一矢をもめくやをいくども歌急より追うく
よりて矢をすつるに幸あるこハずしてより
りかうゝ徒をとりくのがれゆくを一騎だう
り郎従康安うの馬をひいてまゐる康安より
ろうんで見よりてのがる時より奉公衆畠山
の町奉行右馬門七勝ロを歌よつれく
行ぶるをゞれハ歌追ゝくすでより首
をとらんとをを右馬門ちうちうより大より康安
とよばゝつくいうゝ我勝ロとはうをくを
すゝめゆく幸あるこゞ和ゞうくハ康安うれう
取れ馬をとりしいま我をすくハゞんハ康安
勇士ありあるずといよ康安うりてやむ
ゝ敵えをして一百ばかりをりて右馬門七を
のをゝ付康安十八騎なり
天正三年五月二十一日
大檀那武田勝頼と奉列長篠ゝくゝ合戦
の時康安先手ありて甲首一級をとう
てうれと献ぜ志ばくくありて山田平一郎

と又五郎首一級と称して康安法人の中
〻卒一よりひきゑハ汝日ゟの荒云よ
と仰せつけ首と称ぜゑすとそきゝや
卒一郎偽〻ていく我すでゑ
先よ首次敵じ今二てじ先と称て
康安いつく我あよ汝ゑとゝるべきや
といしをあへぞ又敵中ゑせ入く軍
首一級ととりて二てじ先と称て
大機現ゑるいぐ帥感あり志づ〻ありて

卒一郎康安よゝやきけゑハ我ゑよび
けゑいたりゑなり誠よハ首一級と称
ゑゝなり
同年遠州飯田原〻合戦の時康安
ゑゝびよ卒一郎松平伊豆守に属して
敵陣よむしく足軽とつゝ換鉄砲と
ゑゝていどん戦康安〻つ〻馬足軽と
ゑゝ〻先陣よすむこゑ敵うれとう
つかつ〻換鉄砲とゑゝ康安〻先せ猛

此小手の端よりあらうて軍此端と射ことを
とゝのゝ也身すゝ疵つけ平一郎也又換
炮よりあらうて疵とかゝ物多
同年同日小山合戦の時康安多くしよ
松平義丸郎とうりに是程こうつく換炮
とをるつくいどゝたゝうゝ義丸郎討死と歌
まゝく首をきゝんと志けゝと康安也と
ふせぐゆゝ歌を首をとゝ多りをえをば
くゝ康安大よ戦功あり

大樹現兵と遠列并吕よすゝたまゝ勝類士
幸をひかゝくゝ多也よのぐむ時味方此軍
中よ四茂四郎左衛つゝんでゝあまゝこれ
矢をとをつゝといへども歌あゝゝと康安
馬よりゆりて四茂ゞかゝゝゝ多之ゝ矢此
あゝゝくきゝ方をけゝ也より四茂ゞ射ゝ
而此矢果して歌の弓乃之楽よあゝゝ
る地どゝひして家者たゝまゝ為味方こ
きのゝ多とあげゝくゝつて志りぞく

山陣より信康を京安とりてのなしけるハ
勝頼井呂れ川よりとうひまをとき〻今和
歌川をわたす事とあるへし汝ひらに行て
見とゝけよ京安さ旨よろこゝびて井呂よ
りて見とうめゝへ今和歌川と渡る
べき神にあゝ見物こゝに寄之し
て行末とうり来くゝめり色とけくらんとす詩
百九ものを又るのむかゝひと志ら見よりし
てゝ見ばゝ歌川と渡を色〻ゝゝる変せり

康安くハ〻〻見とゝけゝり信康をにもむよ
とけゝ其和ちゝして歌川と渡さず信康
を大ゝ歌義〻して汝〻見とゝけゝ
とけゝまゝ

同七年

大檀現勝頼ゝ兵と後列田中の藩ゝ義の
時康安石川伯耆守数正ゝくみ中よあり
歌数正ゝ陣百へとうしゝうゝ和げゝり
鉄炮とゝゝつ味百れ兵死しきゝてゝも

の巻し味方はしをつ鉄炮ハ歌よあるこゝろ
まれなり数匹康安ハ一かゝりけるハ海よ
くたりゝ紙めぐらして歌のこゝろ前
とうかゞひて鉄炮とるゝこゝ歌ゝるゝどよ
げさゝんといふ康安ゝときてしゝゝ
陣屋ゝよのゝりて歌ゝとゝんゝゝして
鉄炮とつけゝくゝゝちけゝこゝ歌のあつま
為所よあゝりて二人たゝふゝて歌長ゝど
ろゝゝくひきゝゝゝく康安ゝ前とた

づねゝれバ前なきの二人ありて鉄炮の
疵ハいかゝし栗どゝゝよ仲の鉄炮前ゝ
あゝゝゆゝ歌其前紙ゝくゝ引さゝんん
ゝ合戦ゝ康安成敗吉平と力とあゝて
ふくゝ歌とゝゝゝとくゝ城中ゝゝり
ぞうしむ康安城下ゝ附ゝゝりぞうゝて
歌の機とうかゞひくゝ先げせんとゝて歌ゝ
とみくゝ鉄炮とゝゝつゆゝ康安疵とゝ
ふりてゝゝぎくゝ

大槍現同心宇都宮弥右衛門を召たまふ勝頼兵
とゐせしく不意に出を遁より出しく足軽を
けて鉄炮をもつゆく味方あてさくく
康安馬より出て足軽十五人よ鉄炮
とりしせしく山陰とゆりくり鉄炮をて
けうつゐすりて歩地ごろひて山中へゐげろ
味方はくがゐうして検分を召ゆく
大槍現数正と遠列蒲生検校家よつゐり
て小笠原河内守ところしむ康安見よ

きこゐ河内守が郎従よ三浦助右衛門とゐ
ゐあり力人よこえて見よあくろものか
康安うれとうちころして三浦がくく死骸
乃眼指城とゐ時よ多喜右衛門射元忠を
ゐりよ見を所をして康安やむると潜ぞ
してうれとあくゐ多喜大よまろうえで小田
小多といふ猩の小多と敷ぞ
大槍現康安と山田平一とりて仰を射ハ
今軍中ゐくく逆言れのあり汝多れ

ところをべしあり人　命をうくるいとも
前日戦場にて刀ぬきとりゆゑ今日
あるをて陣中の廊下にて見をうくて
服指しうく其胸をつき殺とをす
同九年三月
大檜現遠引高天神の城をせて勝頼が士
卒をうたまふ時康安先陣にすく敵
兵横田甚右衛つまりに取れ櫓の下より
うひうり戦をとげまをいへども敵討
をもとめ
同年
大檜現勝頼と駿河列を同にして合戦の時康安
足軽をつかいどみ戦く首級を得
同年を同合戦の時康安山田平一をとりて
足軽となつく先陣にすむ勝頼が兵多繁
長右衛つ射騎馬よりり金乃助掛と長地と
多繁康安を敵の歩卒をとるる事を
家して其歩卒をまをきありちく山の傍

てゝ[illegible]ぎくと見るく辛一康安よりしきりに繁
う勇若くら車とみる人の[illegible]なり其と
れ良馬よ[illegible]くきくる[illegible]とうそん
車かくし秋先よりく前[illegible]とくぎりべ
康安ハ[illegible]ゝより[illegible]ゝ中よ
そんて[illegible]とうこばいんといふ康安りつと
とと同じて二人前坂ようそんで[illegible]とう
といへどもう[illegible]良馬よりうれくへ仏剛
してくかけしと[illegible]ゆへつぬよりまこう

此時康安勢[illegible]ふが[illegible]とうりやとす
同年[illegible]同れ合戦よ康安勝頼が[illegible]とせて
民勇とてげますす小山田が良[illegible]新本
加兵清射といふりのあり矢とて[illegible]て康安よ
あつ時よ勢[illegible]又右郎といふの馳[illegible]新本
よいしきれ[illegible]場れ行引自中るうぢた
とひ一安人と射と[illegible]とと[illegible]よ利ある
[illegible]ぢ[illegible]ゆぞ[illegible]ぢるやとつくれとりにし
[illegible]ぎく

同年豊臣方城下より せり入時 康安足軽と下知して鉄炮とうつむ敵の軍中より切かくゝ味方足軽と討れ時 康安変れ中より打て鉄炮とうつんとて敵火縄の焔とうつゝ地ゝうひて 慌より 傳くゝのゞ事こに 康安鉄炮より火縄とりこゝて 切こゝ 敵ゝ
して又出こゝ 康安鉄炮と 高より せゝ
ゝ ゝんと 高け迯バ鉄炮の筒こけて大
ひゝくゝゆへ敵地ゝうひてこゝび出

同十二年四月
大樋現 秀吉と尾州長久手合戦のとき康安
石川数正ゞくゝみ中あり て小牧山のうり出
と寄れ

同年
大樋現解云江の城とせあたゝ時康安先陣
よすんで城下よりゝ城門の前より小橋あり
其橋のとふゝ敵と後とあハとれ時康安鉄
炮にあうゝ疵といゝて ゝをあぐれ

幸あるこハずといへども舎釈して城戦を見よ
よりてわらハ小ぜくく時酒井伯耆守傷
をうけありて見とゝんぬる後よ康安と諸とあハ
すべきのときけハ岩淳岩右衛門尉なり

同十八年

大檀現秀吉と同じく小田原城とゝみた
まふ康安大農の跡となりて信長と戦時
大檀現鉄炮十挺と出して康安よ信長ハ
汝ゝ鉄炮とゝるつ代問めて汝が仏よるし

ゝとゝりて七年とゝげまし見とゝるつ屋し
康安傷ゝ一挺とゝりあげて神変まて
大檀現此絵よこれ図皮ゝ多ゝこゝ絵此筒ゝ
汝彩とすて〳〵古とゝふこれ其窟ゝく
ハしき之ゝなり其後
大檀現御ゝゝ矢と城中へゝらたまふた
古此ものにをいさ社てゝ矢のゝつゝ前とえを
しむ古古いつりてゝ矢城中に入とゝ中を
仰ふいゝく見より城中まて其間をけを

むら時ものとまぶこゝ侍るよあるとて汐留いけ
りて我とうぐりよあざむくものなりとて
康安とめて　伯耆ハ汐ゝるよ強らとも
く今ゝ語らに城中を初へし康安
命よ意して矢とるちけるハことゝく城
の堀よ地ちけくをうちふく矢一筋塀の
塀とけゝめく
大檀現たゝれもの御とめて伯耆ハ先よ我
汐留をいくあやまりと思ふゆへ康安

小村ゝうたまへばなゝ紙ゝ丸もとゝ　汐留い
つりて我とあざむきをりゝゝ大きよ
いゝせたまふ
芝長丸ちゝ
大檀現関東御入國の時彩色をとゝりて
台德院殿へつけたまふとき
台德院殿康安とゝふく臣とゝたまふ
御仏あるゆへ先倉橋図逆と御使ゝて
御ゝゝ丸ゝりむきと康安ゝつげたまふ康安

命ぜらるべけかきこと事と祈してゐるべき密談
けるさん事と存ぜず
台德院殿又中多佐渡守正信大久保相模守
忠隣と御使ぶとして
大權現へ仰せ付ぶい康安とたまりて秘臣
たるこゝろめんとなりり
大權現康安ゞ舊切れあつき事と思召
ゆりく御前へめしよせられて合戦のゆ
と御評論あるゆへ御父子ゐらうとい

（どくをゐゝご見とゆみたまい康安とり
て　仰せ付ぶい
台德院殿汝とのゞみふく臣こゝろしん
と思汝はくせんや又我まったとよ
ゆりむりんと思汝見よまこゞりんやいん康安
整首してまうさくいづれよせくたてまつる
君にあゝざゝんたゞ　仰よまこゞりんのゝ見よ
よりて
台德院殿への御恩康安とゝゆへのれ

仕ふ[illegible]つ[illegible]ら[illegible]る色[illegible]を後ありのを[illegible]
てをしたゝさるべしと仰けるバ
台德院殿[illegible]より康安とふをたまひくこ
年の号　御元服[illegible]とをしけられしを数度
とゝ[illegible]なり　御[illegible]一云ありて其後又ありご
〻恩遇よあづりて
同文年九月石田治部少輔三成謀叛を
大檀現関原ふるく合戦の時康安年施藤兵衛尉
と同〻〻右ぎ[illegible]へよありて与矢と号し

て仕奉を
同六年文月十一日従五位下よ叙し石見守
に任ず
同十九年元和元年大坂反度れ御陣よ
仕奉
大檀現薨御の後
台德院殿よりゝ[illegible]へをりて而職をのゝし
其ゝ三ゝ石れ御加増をたまはりて[illegible]
あまりなりしかよあるりてを責石見守

渡邊山城守及び康安御使清乃ゐ
ごろに御前へめされ真田源次郎
横田甚右衛門初康傳右衛門三人ハ甲列の
旧臣なり今康安と同しく
台德院殿の御前に伺して御和話の時
大檀那と武田父子と合戦のようとかたる
六人いきむしは戦場よりかくまれあるう
足及し事かれど今こゝ事をかたるよ一云
もいつゝ事かし横田むし康安ゝ言天秋

ゝく武勇をゝうゝ事をゝけ也ハ
台德院殿御座をとらづけたまひて御感
悦あり
元和八年十月十四日　信をとけたまりてく
ゝ中をとりゝく駿府乃城をまりり常歳と
なる
同九年五月二日病死六十九歳
法名道白

正朝

若狭守　生国同前

大権現よりたゝきまつりて小田原をゝびて奥列

御陣をつとむ

慶長五年

台徳院殿よりたゝきまつりて武田御陣より伺奉る

同十年従五位下に叙し若狭守に任ず

同十九年大坂御陣にて伺奉

聖上年号乱の時御書院番の小頭となり

て伺奉る

元和八年大番の頭となりて領地千石

をたまはる

同九年家督をつゝがせ六千石を給ず

給をうけたまはり父が職をつゝがせ駿府

の番番となる

寛永二年　鈞命によりて駿河大納言

忠長卿より領地をゝびよ不職をものと

同九年惣長郷の事にて常列下総の
城を水谷伊勢守にあづけらる
同十二年正月御教ありて　勅命に
よりて水戸中納言頼房郷にたふ領地の
よごゝろ
将軍家頼房郷の京に渡御の時正勅御
同見いり小袖ゑじゝ銀子を領
宣成
文四郎　志摩守　生母同前
台徳院殿よりたゝ人をあるの時
大権現群臣をとゝらて
台徳院殿へつかはさるゝ時宣成　召出されて
大権現よりたゝ人をあ
寛長永年間京御陣伺奉
同八年三月二十五日従五位下に叙し
志摩守に任
大十人組の頭となり家禄頭
なる

大坂安度ハ御陣小倉奉
元和二年又
台德院殿よりくれられ頭となる
寛永三年御書院番ハ小頭とする
同四年　鈞命よりて忠長卿ヲ
はくくく大番の頭となり二百石の領
地をたまハる
同九年忠長卿の事によりて常列
士淘汰毋恪なるよあづけらる

同十二年正月御赦免ありて　仰ヨ
りて頼房卿よりふ領地をもとの
将軍家頼房卿の高に　渡御の時重成
御同乗小袖をくびり頂戴を領ス
同十七年
将軍家御殿とのゝたちつくせたふ時
頼房卿ニ事よあづり重成ヲ奉行
とゝ御殿造畢ハ
将軍家ヨ渚しまゝ時ニ皆と称ス

また後御普請事とりて御拾物
織すべしと報ずと称領せ

成次

忠七郎　生國駿河

大檜規乃叢命によりて井伊掃部頭直孝
が家臣川手主水が義子となる

元和元年六月六日

大檜規大坂城とせたまふ時成次直孝
よりすぐれ先手となり城中の

剛将木村長門守と戦ひ戦死せん
で捕とあせ討死せ二十八歳
法名源英

忠後

大檜規御不例よりの
台德院殿江戸より駿府へ　渡御の時
よ一日重成と苑内にゆして　伝奏ハ
汝が弟成次大坂に戦場いかゆく武
勇抜群ゆして三十ばかりにて戦死

とをるまことにやむべきを曽我命
と名せたるしるしとかうりをるかハ
ぞとをも一族の義因うるへし重成
命ぜかしけかき事と為て直孝も又
御前より作してかと成次が武勇を仰け
し事と戸を時酒井雅楽頭忠世去井
大炊頭利勝　御前よりて回しく
見と梅ぞ

康信

久七郎　生国武蔵
紀伊大納言頼宣卿にしたがへ大番頭
となる
寛永元年二月十八日頼宣卿日光山へ
参詣ときに康信これをまゐらせ野州
壬生まで倉井伊織と口論しこ
ゝ殺きりころを時よ人ありてゆげさる
を留きれすすやけをども傍輩をき
りころしやしくを死をまぬれくゆぞ

こうのよりんらく廣光院殿御代自
敕をこと十一歳　法名道讃

重之

隼人　生國同所
実ハ正勢がゝなり重成君と号てゝ
忠長卿よりけうへ今報房卿よりけゝ

正求

吾四郎　生國同前
台德院殿よりけうへより　仰付まりて
忠長卿よりけうへ高報房卿よりけゝ

正村

源左郎　生國同所
元和五年四月十六日
台德院殿を葬し奉る
同八年　仰付まりて
將軍家よりけうへ奉る

同九年御小姓組の御番をつとむ

寛永元年御小姓となる

同二年御書院番組に入

同十五年御普請の役をつとむ

家紋九曲の内 釵蓑

え苦

弥三郎　　早世

え心

初の名ハ弥勝

弥九郎　　弥九郎ハ清門射　参列奉る兵を
長親をのときえ心　命とかゝりく
参列源津の城とせらとて大炊助忠京、
その城を攻うりゆく　長親を源津の
城とえ心よたまハりとゝ辞して

うけぐうれと忠家よりゆづる
永禄五年七月二十六日死八十二歳

信長

弥九郎　左馬頭左満門尉
参河の柔地とすて　廣忠うりきて
じ北国より強慶ゆて
天文二十年六月十八日死ス四十九歳
法名源憲

忠次

弥九郎　分記
尾州織田弾正忠参河安祥城とせむ
ときに　廣忠に加勢として忠次とたゝかさ
る忠次うの陣をまもりて戦功あるゆへ
廣忠にもの功と感じて参河ふく
伊田羽根の郡をたまハる
天文十六年九月二十八日　廣忠卿渡の陣

とさして渡河門より攻るゝ合戦のとき忠次
堀を乗越又次郎ひとれゝて忠次死を
時より二十七家為所ハ忠次の後夢うとゝ
どゝも時より歌とゝなる　法名源家

京忠

弥九郎　太郎左衛門尉
廣忠に死参河より帰入のとき京忠の
忠切あつかすり幼年ゝうとゝいへども中比の
ち又年のはてのかの六ケ所を領ゝ
天正三年長篠ハ篠中よりて軍功を
をげまして
文禄二年六月三日死を六十三家
法名源清

伊昌

弥三郎　外記
寛文長六年九月八日病死四十二家

法名源久

忠実

泳三郎　左衛守　外記

寛長三年九月十三日十四歳ニて
白徳院殿へ生れ　御前ニて元服
の時泳三郎と号し御諱の忠字を
たまわり御服拵と称領ニて
同十三年二十四歳ニて従五位下ニ

叙ス

伊耀

定水　伯耆守

寛永九年十二月六日　二十九歳ニて
従五位下ニ叙ス

忠尚

千助　与左衛門尉

元成

六郎左衛門尉

外記忠實家紋一葉の菊

忠京

大炊助

忠定

大炊助　冬列歟田数若は に任せ
同郡小英村の城を米は四郎右衛門をせ
うく城ととゝ号せるの ら保母村と須ざて
大湯の地ゝ也ゞ 同郡原溝の城ゝあり
しかれ忠定ゝ ゝれとせら 為ゞりて原溝の

城に居て
享禄四年六月十九日病死　法名源冬

好京

大炊助　源溝の城に住て
冬列碧海郡中嶋板倉弾正が城と
せりとりて中嶋を見られ五郎を頼ぞ
信長尾張列　楠枝另におゝくと川義元
と合戦のとき死

東照大権現尾列大高の城にましますと紀
好京信奉と義元討死の後
大権現南陣ゆり好京信奉
東陳の吉良歌とうたれと紀好京吉良
おゝくれてくる数なりうれと紀
好京が子伊忠と冬列三野の城へ加勢
したゝはすにより好京が家人ゆりくこれ
ちくこと東陳よこれときいゝ中嶋の町
の民一人とらと時よ好京家人とし

こさわく東源の長城おいたりぎくおす
一里ばう東源の辛吾の城ゑ
ゆくものゑんと善明の境よりきたりて
軍を出しておたるふ好京が長いよく
つけりくをそこしをさうず戦場くを討死
をを好京をびよ十郎右清門 六郎右清門
久変彩八郎 三郎戦死をしの校倉八郎
同三郎九郎 松平門記号の親族二十
一人若士すべくこ三十人うち死を時よ永福

四年四月十四日なり好京家四十四
法名源秀

定政

孫十郎
子孫すゑしにんとうり

伊忠

主殿助 源清の城よ住を
大権現参列 畏清よまし面をとき一向家

の一揆蜂起ス大将平右衛門し部八兵衛
が一族友同次郎右衛門ホ部田数登羽ヲ
乃古城ニ立てこもり伊忠源溝ヲ
たゝきてこれを城せしるとき し部等一揆
の約と変じ伊忠より内通ヲ乞ひ
伊忠登羽の塚とせりやぶる大将ヲ
八升湾ヨリ走り友同八年生し部が
捉ハるにより し部伊忠ヨリ友同
が命をとゝろふ伊忠ヲ内ハらゆるして放

ヲ乞ひ二年
大槍現これを感悦したまふ其後其同
りをされ器湾の伝廉を行ふ
し部が子孫ハ忠房が家中ヨリあり
大槍現その功を感じて感状をたまふ
大槍現源溝の塚ヲ波御のとき再興
一ト説伊忠ヨリたまふ又長沢の海城
とまりべきの比御書をたまハる
そのとき武田信玄兵をひゝ冬列

牛久保より出張しけるが伊豆長沢より
く事をきゝて軍をひかゝりかゝりこう
大檜規参列若田の城をと兵をかまふと
き伊豆守が長足ちの者にいろうてこ
りおをきつゝ
江列姉川合戦のとき伊豆が家老湯田
右清つ伝ら死を
越前朝倉が兵江列へ出張の時
大檜規の伊より
いく伝長のかゝ様ふこし

て酒井右清つ尉と同しく敵同を
遠列無川の城をせむるとき伊豆酒井
右清つ尉と踏ゝ
家人石原十助歌の城へいでんとすれ
とゝてこを祇村こうて歌兵そのこく村
ゝと感じてその矢ゝびよ金九国
扇と十助よとゝ十助が子孫いまに
こをあり
去藤合戦の時伊豆ゝびよ嫡子家忠

潟井左衛門尉と同しく葛巣より出て
伊豆いしの[illegible]に籠り戦死すべし
家忠我より先こうこうかれ勿とまりた
ふしてうくはせいしんをうつ其
兵式を以て家忠よつあく戦の志り
色とさうかとして家人等と別れ盃
とをかはして出陣を勝頼か敗軍の沿
と志こひてせ入力戦してつるよ討死
時よ三十九歳天正三年四月二十一日なり

家忠

法名源了

主殿助　源藤の城より住て

大檀現遠列小山の麓とせちたまふかき
家忠こゝに志こゝ家人より又葛切あり
遠列高天神とせちたまふとき家忠供
奉て家人板倉義長ら死其外兵
士多人戦死て

大檀那言天神の大伯賀荻村二ケ所を
とせんとすんで田中より井岳の
城とりこして南陣の時柏船の城を
胡坐家駿河守無城をして味方の郷乃
城とをくる
大檀那是より柏木の城迄よりう
ち是より言天神とせちこみ麻縄を
の長さ拾筋と送る時より家老
御使として江列安云よりう織田信長
より渇して其ゑをたぐ信長と又家臣と
濱松より来らして返礼と陣せらる
駿列田中塚せられとき家老これなむ
く家人捨とあハせく歌長とうせる
歌ハ中より一人ちとりてきてろ味方捨
ゑくこ五こよりあひたびよ勝負と
変せとあるうづうる名乗く歌のちと味方
へうり我捨と歌よとく敵その外ゆく
軍功あり

尾刑羽黒合戦のとき家老酒井左衛門
と地ごく家臣にて家老にて首級二十
餘をうばひ馬を乗とぶらう
去久年合戦のとき酒井左衛門石川伯耆
より屬して小牧のうりおとまりてそのと
き秀吉小口樂田にたむろをなす酒井
がつをりの小口の柵をやぶらんとけるど
も伯耆守美作ありてせ幸をせさるれ
ゆへ家老左衛門とうりにいくさ敗らて

ゆへ家老このゝび家老をうばひ家人等
戦功あり
大檜現器濤より濱松にうつるなをき
石川伯耆守とそでりて器濤城をま
りうしむそのゝち伯耆守とぐこよりも
むんとする時器濤騒動して家老こを戒
きて敵中より源蔵より器濤にいくり
うれとをびりてその二のもとまりう
大檜現濱松にうつるこを戒きこうり家老

ごとく畏海の城にいたりて感悦し
たまふ
小田原陣のとき家忠酒井左衛門尉と
ともに相列より川口陣をとらく
四月より七月まで〻〻戦ふ
月より篠曲輪に強勢せしを法陣号欲
兵衛討ふ
又此家忠
又此神とき〻〻秘密して
大檜現の南本陣よりうち兵衛討ふ

ゝ篠曲輪に強勢なりとゆとけ
大檜現きこしめして是と奇なりとし
たまふ
大檜現翼東南入国のとき家忠に命じて
武列忠の塚とまりしめ東北の江加湾
ありて一百石の役とつとむ
忠吉忠の塚と領じ小平家忠を
別に鞠命とゝ
の城を領じ
下総の国小栗川

文長元年上杉京勝奥列して謀叛
大檜現伏見より御發向東征の時高長
義右衛門尉を以て内藤泉守
相手右衛門尉 作よりて伏見の
城北方攻落とけ生捕の時より高
勳石田三成謀叛とおこし籠城中約云
秀秋大軍とよりて伏見をせめ
むえ右家右衛門尉高長義数日あり
八月朔日塀際より攻入とろ時歌長義
地までせあれが敵清津が長別取下野家
よれ逆て逃とあはす家老とひとし
ら志し家老数度力戰して歌よたの
服とせりまとく志ばしく休息と敵をぐ
よ塀門のあいごよりろ家老門とひら
ひて討死せんとしけもとも門とまりろの
すでよ死しけもバ論のあり所とろ
ぞして門とひらくくとあるとハぞゆ人家人
よ敵とあせじらく家老切腹と家人相

九七郎為田久助大原九郎次郎同名七郎
鴨敏茂三郎 原田四郎記三浦右馬八郎平
理助原田清七酒井助右衛門野久四郎
横山義繁酒井治助越山甚一郎同
義重服部八郎橋吉清助山名兵吉討
死ものは若すべく八十四人時より家老軍
六策法名源義

忠利

之敏頭 注文佐下
下総国小笠川の城より住
義長六年京勝藤殿の時忠利
台徳院殿にてこの人をもって宮殿よりう
ちから黒田より御名を授け時忠利より
仰せ付ハ小笠川の城ハ常別の境なりよ
くこれをまもるべしとこれをもって忠利
小笠川の城をまもり国が原御陣の後
大権現様多佐渡守をもって忠利

信長ハ関東ハ中ノ地ヲ一信ノ領地ヲ
たまはるべきよしあり忠利板倉
伊賀守をもつてねがひ之儀の申頃ハ
もしくべきよし言上をこれより
大権現ニ又忠利ハ命じて源溝の城ハ
かまへしむ
同九年信濃下野叡
同十七年　鞠命をかうむりて源溝を
あらため参列岩田の塚をたまはれ

同十九年大坂陣の時歌兵構列仁名寺
ハ城をつきくずしあとをせきいりゆ味方を
發する事を始
大権現忠利をもつて伊豆箱根守相方ニ
同を賜ふ　命じて信濃ハ仁名寺の
城をきりくづし犬牌川のあとをせきとめ
て神流筋ハ地すべりこれより忠利
かこにいたりて三日の間に河水をせき
とゞめ忠利陣を天満よりむ

時大坂あつひみなりて忠利陣をとり
ゐひ〳〵居海をとまりをとる大坂より
薩田隼人遣新三十郎がりとにさつて
居海ハ大坂ハ紀州なれハ其勘気をと
ぐ為きれをとせむ時ハ秀頼の使者三
ト三百人神海ハすみ家ハ三十郎が
使者居海ハさつせきさつてぴるをと忠利
ハ〳〵忠利をおいら使者をとゝ薩田
隼人ハいひきゝ我きゝ汝をの命を
うけて勘気のゝをと三十郎にさつく
神海ハあり此ゐ又居海ハいろんやい弟
忠利ハ弟ありて此不絶まりられるゐんぢ
ゐやゝ志りぢゝ為こられをもりて隼人
ひきゐ
大檀規ぴるをきあゝめ感英なる忠利
翌年正月まるゝ居海ハ生業を
元和元年大坂乱の時二條乃城ハ知て
本多上野介
鈎命とかゝり忠利ハ

つげていく常陸介教幼かなるを忠利
が舅奥州守護対馬守とともに佐奉ゼ
と忠利あくへていく父家忠先年伏見よ
切腹討死を忠利つゐよれとゆゑい
て小身なりゆゑいかゞるとゞ方丈切腹く生陣
のすわくバ孫ゞくハ先ゞけとうけなまいん
上野介いく　鈎命なりを肖すべくゞ
忠利がいくくゝ忠訴いくすべゞ節
かうれをゆゑを忠利つゐよ云とて

大檜現作をまゝハ弱年ゝ身として言とてゝを
ここ論道理を極ゞとハゞを常陸介に
たしうなる臣ゞ忠利ハ累代の臣と
て郡人を又皆しいつをれ地よ切むくとゞ
とをあに忠ゞずゝんやまげて常陸介
にゝこゞふべしうれゝなゝ辭とゝるを
滑ゞしてこを亡に忠ゞこゞよ大坂合戦ゝゝ
戸田左衛守よ墨海の城を
又濱松の城まを加藤ををせたまい

又吉田の城主加賀をとをせたまりんとて
黒澤より忠利が家臣松平勘解由左衛門
とりてこの世たましひけゝハ忠利ハたゞと
爰守よとゝんとするをや勘解由左衛門こ
ゝへてゝりゝハ忠利が家臣松平勘解由左衛
松平与次左衛門大原源理酒井善次郎
黒田孫左衛門板倉七兵衛ふなり
大檀現こゝ玉ゆきこゝめ御感わりゝく
ゝれゝハ皆御のとゝもとなるゝ

ゝく別よ加賀とをきたまハゞ
同九年
将軍家ゝじめて御上洛ハ軍宣下御条
門の時忠利弱馬まて供奉
寛永九年六月廿日ゝ病死
六十一歳　法名源越

忠真

長三郎　出兵衛

十六歳より
大檜現ようけん寺に
伏見より病死 三十二歳
法名源泉

忠良
長之郎
後列ようれつ
元和六年四月十五日
台徳院殿と共に殉死

忠一
宮之郎
元和元年大坂陣ふく戦死 二十六歳
法名源清

忠重
三郎兵衛 病死 法名源芳

寛永八年十二月二日右田伯耆守
属して南手院書をつとむ

忠隆

兵庫頭　従五位下　一名ハ忠改

二十歳の時より

台德院殿ゟ法名を賜

寛永二年九月二十六日病死三十二歳

法名源峯

忠久

孫ゟ兵湖

寛永三年十二月二十一日

台德院殿

將軍家と称し事始時ゟ六歳

同十六年七月二日　仙石大和守組ゟ湖

歳とつゝむ

忠房

主殿頭　従五位下

吉田ゟ移ル

台徳院殿と称し奉る時より家九家九時
より江戸より使を
寛永九年八月十二日参列苅屋の塚
とたまいる時より十四家
同年十二月迄之使下より数を
之殿頭忠房家紋九の内より開扇

●定政

孫十郎

永禄四年閏月十五日兄大炊助好豪と

同〳〵参列出言より始くうち死

忠政

孫太郎

生国同国

大檀現よりくごひきりて度〻戦場よ

とむらひ

台德院殿よりたまはり給ふの所領を

養とつとむ同じんの所をゆづる

元和三年

將軍家とゝ

同五年六月十二日卒七十二歳

法名源心

忠勝

弦右衛門　生國同前

大權現よりたまはる

慶長十九年三十八歳にて病死

法名昌源

政勝

彦兵衛　生國同前

大權現と称し奉る

元和二年

台德院殿にしたがへりて大御番をつとむ

寛永元年

將軍家へ召さる

同九年病死 二十六歳

法名永記

政次

助之丞 武列ようます

實ハ松平市左衛忠次が子なり

政猪が養子となる

寛永十一年 鉤命により政猪が

遺跡をついで大御番をつとむ

忠次

市左衛 參列ようます

寛長十九年大坂御陣の時伏見城の

御番をつとむ

翌三年大坂乱の時紀州牧野因幡守組

あらく働き

元和元年病死　四十歳

重次

孫大史　相州ようまち

元和元年

台德院殿の命ゟ忠次が遺跡とつい

ぐ

寛永元年

將軍家と祈しゟ大久保右京亮教隆

政次

くみまくく大海畫のくみぐらとなる

助くゝ墨

松平淡路守清政婿が養子となる

孫重次助くゝ政次家紋九の内三矢答

国立公文書館
National Archives of Japan

光親

次郎右衛門

参河鄽見に住

重親

得十郎

永禄元年正月十日死

法名浄覚

親友

図書助

冬列の内福田村廣利村歌石村猛野木村
小井沼村小井田和村下河内村を領ど
某年八月二日冬列西野合戰の時討死
家人も又八人戰死を

忠恒

次郎右衛門　生國參河
本村彩助郎不忠の事あると紀
親忠を相率隼人同苦右衛門射に命
じて毒藥を塗りむ為人おびゝく牧
像するにより忠恒これを塗る時より十七
年　親忠を其夢と感じて岩平村
梨野村板ゝ木村をたまわる
某年六月廿九病死　法名玄悦

忠治

彩助　生國同所
東照大權現異海に御座の時冬列歌田勢

の内ゟ長遠列の内辛口ふく二百貫地
とたまわる
某年正月二十二日病死　法名道林

忠綱
彰助　生国同所
天正十二年六月十九日尾列蟹江合戦
のとき紀三十二歳
法名業風

親正
彰助　生国同所
大檜現よりたゝ人事
愛長之年間ゟ京陣の時伝奉之後
伏見より地ゟ南勘定とかゝり大坂
陣の時　召出されて伝奉
大檜現薨御の後水戸中納言頼房卿
よりたゝ

親次

清水清門尉　生國同所

器淳小地方　大檜規と為し　真後卿のやましあり

小より叡山に　學問を

某年十月二十三日四十七歳にして死す

法名善清

重弘

新本檜兵衛　松平氏と称ぐるをはばかりて毋方氏

より新本と号す　毋は新本三郎九郎の姉

なり

元和九年　生まれ

台德院殿に仕へ　奉る

玄鐵

阿部和右衛門

某

阿部和右衛門

女子

甲斐中務忠勝が書

重吉

次郎右衛門　生国参河　郡見の住人

永正九年重吉十五歳にして師匠よつ
いて書をとゝのゝふあり時敵萱生をとうひ来
る重吉出すと師匠よりけゝるよゆゆバ
ゞして獨萱生のよゆりむき捨とひつゝげ
萱生の横よりきりつけ首級
と淳ゝり畠山の潭正右衛門尉とゝゝく法
士と同ゝ尉とゝ感義と潭正右衛門ゝら
重吉を招ひゝ近侍のさゝひと
清康君廣忠ゝ仕へしむ其のちれ
けいゝ

大權現よりたゝ賜
永禄元年鄭白回守寺記の城より出て
ごりゝ重吉尉とせりゝれ戦ゝ次男

殷若狭が家士名倉氏討死して重吉戦
功とせしてうちうち数〻川法アを捕
義元を武功と称して感状とさづけ寄記
の領内ゆく〻百貫文の地とあるふ
同八年参河上野合戦の時軍功あれ
ば

大権現御感ありて御腰指とたまはれ
天正元年
大権現の仰よりちゝ南瑠と信康
も又若せ事記
同三年遠州二股川合戦の時法せよん
ちゝ戦功あり時よ七十八歳法せふゝ老
と感賞して光ちうといへども壮年
の志よ法さまりといふ重吉松平石見守
よいひ家記ハ秋既よ老まよ地の老て法
ちと勇とあるそうんとよハあるゝで信長の家士
平手氏秋と勇とたゝ屈んとすれのゝと
罕少人秋も又先陣よもむとふ式部数

多の武功ありしことども詳しく爰に為るさど
天正八年八月二十七日参列野見しまく為記
年八十三　法名浄久

来

伯耆郎　庄左衛門
唐山合戦の時二十四歳まく討死
法名浄安
般若助

寺部の城合戦の時討死を今川義元感状
と文重吉よさづく庄左衛門とよ見と有るを

昌利

伯十郎　庄左衛門
高天神彩府小牧小田原奥列名護屋
本の陣の時
大槍現の伝来を
真田陣の時

台德院殿よりこゝに葬る
享年十八年十二月廿十三歳にて病死
法名貞山

昌吉

伊市郎　左衛門　生母民義
享年九年三月
台德院殿よりこゝに葬る
同十九年大坂陣の時松平丹後守組より
屬して發向せ
元和元年大坂亂の時　鈞命により
て丹後守を同じく江戸御留守番をつ
とむ
同九年四月
台德院殿薨ぜらるゝ
將軍家へつけられし時昌吉を中よりあり
寛永十九年江戸御留守番とあり
采地の内加增と称して与力同心を

あづま

昌信

傳六郎

正光

市之丞

昌重

傳助　又郎兵衛

元和九年

将軍家と称し参てまつり寛永廿年

より仕へ奉る

同十四年大御番をつとむ

十年

岩重

小沢瀬兵衛　系図別よろしあり

重勝

信之助　越前守　大渕守　生国三河

永禄二年十一月より御ぶりく

大檜規と称し事記

同七年重勝十六歳にして大番頭となる

去る年合戦の時首級を得たり

天正年中石川伯耆守逆心にて異儀とか

京都より押しむく時重勝より遠異儀に成塚へ

もつてさくぜんする　上国より遠しけもで

重勝ぶんぜのおこりぶる成ぶりぶ御

感あり

慶長八年従信下より叡し越前守に

任ぜ後大渕守にあらたむ

同十七年　勅命よりして上総必患難の

家元とあく越後国より移り三条の城主と

なる此時大番頭と成男漢ゆゑ

患難を防列より勲ぶ長の坂　りまれく

古德院より仕へ事記

元和三年二万六千石の采地を給りて下総国
関宿の城主となる
同五年　勅命よりして関宿をあらため
遠州横須賀の城主となる後府の城代となる
同六年十二月十四日病死七十二歳
法名明白

女子

松平周防守の妻

重忠

伊三郎　丹後守　従五位下　生国同前
一名ハ重政妻ハ名屋伊賀守むすめ
元和七年横須賀城主となるため生国より移り
てこの山の城主となる四万石を領ス

重直

丹後守

実ハ小笠原長親が埴ヶ子なり童患ひ
と成るゝ家督ハ伝ひ

童長

伝ヱ門　清水守　注ヱ作下
女ハ上ヨリ出ル

勝廣

伝ヱ門　生田越坂

女子

品川内膳正ヶ妻

女子

塚原次右衛門ヶ妻

童則

半次郎　注ヱ作下　内膳正　大湯守
生田冬河　女ハ上ヨリ出ル
変長三年そむく
台徳院殿ヨリ注ヱ作
同ヱ年真田陣ヨリ伝奉

其後松平丹波守重忠より届し絵図と成
て伏見の塚番とつとめ枝地より居すまする
之年
同十八年御歩りの頭とまりて歩卒三十人
とあづかる
大坂西奉行御陣ハ歩卒三十人とかゝて
伺奉ル
元和三年之絵図ハ岩槻城より番所ハ熟番の時
重則と夜石見守と同しくと使として夜番

より勤むる
同七年御加増と給り御歩りの頭とあるため
大番頭とかゝて馬之丈十弱歩卒二十人と番
同年大坂の御番とつとむ
同九年御入洛の供奉
寛永二年与力十弱とかゝ大坂の御
番とつとむ
同三年御上京の時重則江戸より京都ハ
勤むしく　宗源院殿逝去ハ之と言上ス

同年迄ゝ仕下よ叡一図賜ゝよ仕て
同年むゝ中暫かゝ獨辛去よ付く
天寿院殿のけしうして横列よ地むく
同ゝ年　寶蓮院殿の御遺言として法
華物切の時けゝ代して後列よ地むく
同七年大義頭とあゝたゝ御義ちゝ若義と
なる又御奏者義とゝつとゝ与力十騎
歩辛ゝ十人と部ゝ
同年　鈞命よりて御取詰とつとゝ御
新筵の座よ仕て
同十年御加増と称頭と
同十七年　鈞命よりて与力ゝ騎歩辛
二十人とくゝ部ゝ
同十八年十二月二十七日病死六十二歳
松巖院と号て

童丞
右郎八　生國武蔵

女ハ屋代越中守ゞ妻
寛永十年十一月廿五日
将軍家ゟ被仰付
同十九年家督ゟ
将軍家ゟ被召出
同年八月二十三日　勘命ゟ
清水門の御番をつとむ

女子
女ハ上ゟ同し

女子
女ハ上ゟ同し
和郷孫六郎屋敷ゞ妻

女子
女ハ上ゟ同し
神保左京亮ゞ妻

重信
弥吉　生国参河　女ハ上ゟ同し
松平出雲守勝隆ゟ召出

勝隆

惠左衛門　出雲守　生國筑河

母ハ之ヨ同し

寛長十八年ハ[illegible]

大檜現より法ノ[illegible]

同年七月二十一日　鈞命ヨリ大番頭

となり[illegible]七十騎歩卒五十人と[illegible]

同十九年大坂陣の時勝隆[illegible]七十騎歩

卒五十人と引[illegible]坂へ

同年十二月大坂和睦の後

大檜現より[illegible]て二条の城より

台德院殿ハ勝[illegible]清越年正月三日

大權現二条より駿府ヘ　還御の時　仰ヨリて

く　將軍勝[illegible]

もて警衛[illegible]

水野伝[illegible]

目を強て[illegible]

台德院殿の御退陣と雲[illegible]伏見ヨリ

台德院殿と称し奉りまつる時より勅諚と感じ
給ひて銀子五十枚頂戴たまはる
台命によりて上京仕りまつりて強盗より
元和元年大坂乱の時強盗七十餘人
五十人と引ひきゐ供奉
大樹規範御の強盜府より江戸へ
台德院殿より仰せ付られ大番頭ものとし
元和三年京地の御加增とたまはる
同年十二月従五位下に叙し出雲守に
任ず
同六年大坂の御番をつとむ
同年十二月御加增と称領を
同九年
將軍家よりつかはされ大番頭ものとし
同年御入洛の供奉仕京都あひしづまる水
給よりて大坂の常番となるにより
組中のもの五十騎 勾命よりて給邊
を賜はる

同年十一月又　勅命よりして古乃平治と
椎村生駒寺よつけ治ふ
寛永元年大坂の陣賞とつとむ
同二年陣入治の仕事
同八年大坂の陣賞とつとむ
同九年越後の將光長の妹九条右大將
嫁娶の時　勅命よりして興副とつとむ
治湯よりむく
同十年陣賞者賞と称つとむ

同年乗地の陣加增と称領地
同十一年陣入治の仕奉
同廿松平中務少輔忠知死去の時
勅命よりして沼津より豫州より出き故
領地の事とゆ治
同十二年豫州松山の藩と松平伊予守
たまりの時上使として豫州より
同年大洲領とあたられ安芸右京亮重丟
城市正利重と同しく寺社奉行となり

上法皇の御沓とき〻御養子のよし
同十三年右兵衛佐賀茂孔雀の時　佐とかう
ゆりて勝隆松平右衛門尉と同しく相列
宮上よりゆり枝を賜ふ所をあらため改替を沙
汰さる
同十四年三月二日肥前国鳥栖より出ル
同年九月　崇源院殿十三回忌の御追善と
堺より寺まで魂切の時僧衆をあつめて万部
理と讀誦を酒井讃岐守忠勝安芸右京を
主長勝澄をゝびよ伊丹播磨守御法事
の教言ゆゝり
同十六年御加增の番地となりて三緒
國佐賀の城主となる
同十八年　鈞命よりて能治橋の御門
費とつとむ
同年小条出羽守屋宅をたまはる
同十九年能治橋の御費とあらため和田倉
の御門費とつとむ

同年九月　崇源院殿十七回忌法事として増上寺より百部経を
讀誦の時松平伊豆守信綱妻室長と同
〜勝隆卿法會に出席するとのことを

女子

岩淵吉左衛門が妻

勝廣

傳五郎

実ハ清水四郎長が子なり勝隆卿と養子
となす

寛永九年七月十一日ものがたりて
将軍家より召しかへされ
同年十二月法印下し叡山義濃守に使ず
同十一年清水入道の使者

女子

実ハ大隅守重則が子なり勝隆卿とやし
なう伊賀吉左衛門が妻

家紋丸の内より書籠

なハ葵うりとゝ也愚ゝよりて是

とあらたむ

信廣

松平左衛門　信光の庶兄

生國參河

脚のやまゐありて松平の郷より勢居る

長勝

松平左衛門尉　越前守　生國同前

明應二年十月十三日參河上野の城主

何紀滿之助（或八郎二郎ともよむ）　なるしげ寄紀
の塚を移す日向守衣の塚を中条出羽守
伊保九塚を八草の城を為兵とりわて
冬列野田村よりころ　親忠をこ城
ふせぐ時よ長猪伊奉一戦とそげま
城とりこ妙高敵つわよ敗走を

時茂

右郎左衛門　越前守

天文二年三月二十日冬列廣瀬の塚を三宅
右衛門尉為紀の塚をと兵とりわて岩沢
よりこ紀　清康君こ城ふせぎ給ふ時
猪茂が子弥十郎討死を

信吉

右郎左衛門　隼人佑

親長

左郎左衛門

某

偽十郎

天文十一年八月十日参列小豆坂合戦

の時　廣忠卿より高こぐしを乗りて石川

義元が兵と戦死

重正

民部　生国参河

正成

次大夫　生国同前

信貞

次郎左衛門　生国同者

信久

兵助　生國武蔵

寛永十八年三月

将軍家ゟ祢しを賜

家紋茂の丸の内ゟ桐塔

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan